2007.1 No.16

さちこのニュースレター

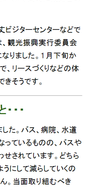
旅の楽しみは、地元の人とのふれあいから
―――新潟県佐渡の観光ふれあいガイド

民謡「佐渡おけさ」で有名な佐渡島は、沖縄のそれ*に日本最大の離島です（*八丈島の約12倍）。かつて10万人を超えていた人口も今や約6万8千人。とぼらない人口減少と観光や産業の低迷に悩む姿は八丈と重なります。昨年、佐渡に渡りガイド費視察について視察してきました。

新潟港～両津間はフェリーで2時間ヂェットフォイルで1時間、これらが4、5便ずつ往復しています（この他と航路あります）。空路は、新潟空港とをむすぶセスナ機（20分）、鉄道がないので、来島者はバス、タクシー、レンタカーで島内をめぐることになります。

プロでなくても　両津港近くの観光協会で話を聞きました。2004年3月佐渡市への合併を機に、それまで佐渡の各地域で独自の活動をしていた観光ガイドの内容を見直し、統一することになりました。いま活動しているガイドは約20人。地域ごとの特色を生かし、観光目的にあったコースをつくり、観光客が地元の人とふれあって思い出を残せるようにと、素朴でなごやか実用的な案内を目指しているそうです。

統一されたしゃれ　ガイドの利用者は年間1000人とまだ少ないですが、最近は5～6人の団別行動をする修学旅行の生徒によく利用されるそうです。1つのコースを1～2時間かけて案内し、2500円を受け取るしゃれてます（5人で頼めば一人500円の負担）。パンフレット制作などに観光協会の援助があるとはいえ、かなりの格安料金です。このほか、ダイビングとトレッキングの有料ガイドはすべて民間で活躍しているとのことでした。



この日、私たちも両津港周辺の「ふれあいガイド」を体験する予定でしたが、悪雨のため室内でガイドの説明を受けました。佐渡島出身の思想家「北一輝」について熱く語る81歳のおじいちゃんガイド、その土地の人物・遺跡・自然への踊りとこだわりが強いからこそ、人を感動させるのだと思います。

変わる旅の目的　旅行のかたちが変わりつつあります。人とは違う特別な体験をのぞむ観光客が増えています。町が4年前から取り組んでいるガイド費視察事業からは、これまでに約40人が卒業しました。活躍しているガイドもいます。八丈の特色や自然・文化・産業など観光資源の価値をどう観光客に伝えていくか、同時に観光客のニーズにどう応えていくのかが、今後の課題です。

観光客とのふれあいを大切に　ふるさとが、民俗資料館、八丈ビジターセンターなどでは、すでに史跡・自然についてのガイドが実践されてきました。町は、観光振興実行委員会で検討を重ね、観光客向けの体験メニュー本格的に始めることになりました。1月下旬からは、中之郷の「えこ・あくりまーと」に隣接する「フラワーセンター」で、リースづくりなどの体験教室が開かれます。問の多い八丈の、問の日対策としても期待できそうです。

町が抱える問題をひろってみると・・・

決算審議から　9月議会では公営企業会計の決算審議がありました。バス、病院、水道とも厳しい経営状態が続いています。水道は、かろうじて黒字になっているものの、バスや病院事業は毎年大幅な赤字で、一般会計からの拠出金で埋め合わせされています。どうもむたちの姿勢にも不可欠なものであるからこそ、この赤字をどのようにして減らしていくのか、町の大きな課題です。しかし、有効な具体策は見つかっておらず、当面取り組むべきは、歳出削減に努力し、ふくらむ滞納分を少しでも回収していくことでしょう。

東海汽船と商港　これまでに何度か東海汽船や商港の問題が取り上げられました。9月議会でも「荷物が薄っている」八重根港の整備が進んでいない」「桟橋にノロが発生していて滑りやすく荷役作業が危険、かさ上げも必要だ」「雑岸でさが引き波ず欠航が多い」などタ多くの指摘がされました。住民の暮らしや観光・商業・地場産業の振興にとって重要な港です。議会をあげて早急な改善を要求していきたいと思います。

療養型病床　療養病床には、入院費が介護保険から給付される「介護型病床」と医療保険が適用される「医療型病床」とがあります。国（厚生労働省）の方針が変わり、2012年をめどに療養型病床に介護型病床が介護保険の適用からはずされます。介護型病床の入院コストが一般病床にくらべて割高なので、これを減らして社会保障費を抑える目的で、介護型病床の患者のうち、医療の必要性が低い人を有料老人ホームや特養ホームなどに移していくというのです。施設の収容能力にも限りがあるので、行き場を失う患者も出るといわれています。

現実には、高齢者の介護と医療の境界はむずかしいのではないかと思います。高齢者の割合が大きい八丈町では、介護と医療の問題が必要に高齢者は増えていくことでしょう。町と費和会で連携・交流を進めながら、町独自の解決策を考える必要があると思います。

歴史民俗資料館　観光客を案内して資料館を訪ねました。館内のガイドはわかりやすく説明文も増えて内容が充実してきましたが、冷房がない上に湿気がひどく、カビの臭いが充満していました。展示してある収集資料も痛みがすすんでいます。議会では、エアコン設置など観光環境の改善を要望しましたが、建物自体が文化財なので手がつけられないとの回答でした。今後、町民の財産である建物と展示物について、よりよい保存方法を要望していきます。

ふれいくたいむ

役場の数地内にあたらしい建物ができたのをご存知ですか。バスの駐車場の東側にできたこの立派な建物は、くみ上げた水を特殊な膜でろ過した飲料水を、ここで作っています。

最近、東京の水が美味しくなったと報道されていました。この高度浄水処理装置のおかげだそうです。この施設がある藍銅区の金町浄水場では、「東京水」として500mlのペットボトル1本100円で販売し、これが好評ならだそうです。八丈でも試してみますか・・・・

6月定例議会一般質問

1. 学生に対する学資援助の充実を望む

八丈高校を卒業した進学生の場合、親の負担は授業料のほかに生活費と住居費が加わります。こうした不利な教育環境は離島に共通しています。奨学金以外の学資支援を援助する考えはありますか。

教育課長　町の制度以外には、国の（財）教育資金融資補償基金、都の育英資金、日本学生支援機構（旧日本育英会）、東京都（社協）など、重複してできないものの様々な奨学金制度があるのです。いまある制度を利用することで対処してほしい。奨学金以外の学資支援は考えていない。

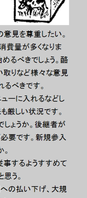
幸子　町の奨学金制度は、あくまでも授業料の一部を援助する程度の額にすぎません。ご指摘のように日本学生支援機構や社協生活福祉資金（都就学資金）も、重複できません。また、東京都島嶼町村一部事務組合（一組）の支援は事実となくなっています。料子のつく民間の金融機関から借りることになれば、進学を希望する生徒とその親にとって大きな負担になります。入村資成と教育の機会均等の観点からも本土なみのチャンスを与えるべきではないでしょうか。町の奨学金は、利用者は多くはないものの返済状況は良好です。やがては返還される資金でずから、もっと枠を広げ進学を後押しする体勢を整えてほしい。町は奨学金の増額についてはどう考えていますか。

教育課長　現行の金額が妥当であるかどうか、増額をふくめて検討していきたい。

幸子　一組の学資支援は事実上廃止されましたが、あらたに奨学金制度をつくるよう要望してほしい。

町長　一組全体で決定したことなので、むずかしいと思う。

2. 八丈牛乳の消費拡大キャンペーンを



八丈牛乳の消費量が減少し、酪農家の数もわずか数軒になり、町の酪農事業は危機的状況にあります。八丈牛乳の消費を促すために、住民に対して安全で安心な地元の食品であることをもっとアピールすべきでしょう。町は住民の先頭にたって消費拡大のキャンペーンを展開する必要があります。町は八丈牛乳消費拡大のための具体的な施策を考えていますか。

観光産業課長　搾乳量は確保しているが、消費が減少しているので、ボスターでこつ心方面に消費拡大の協力を依頼している。酪農事業の将来像については、酪農部会の意見を尊重したい。

幸子　2年前になると学校給食の需要に加えて一般住民の消費量が多くなります。キャンペーンは見量が増し、需要が減る時期（秋～冬）に始めるべきでしょう。酪農家の経営状態は年々厳しくなり、酪農部会でも加工乳の買い取りなど様々な要見が出たようですが、当面は牛乳そのものの消費拡大に力を入れるべきです。

民宿やホテルで朝食に加える、町の飲食店で八丈牛乳をメニューに入れるなどして販売促進をはかってほしいと思います。一方、供給量の確保も厳しい状況です。今酪農家は軒になってしまいました。これで安定供給は可能でしょうか。後継者がいない現状では、牛乳の安定供給を確保するには新規参入が必要です。新規参入者の受け皿として収入確保や施設整備をする考えはありますか。

観光産業課長　今いる酪農ヘルパーが本格的に酪農に従事するようすすめていく。和牛生産も考えているが、やはり新規参入はむずかしいと思う。

幸子　牛乳工場の存続のために、牛乳工場の下り、民間への払い下げ、大規模な補助金、などの思い切った施策を打ち出す考えはありますか。

観光産業課長　当面は牛乳の工場、売り上げの回復に力を入れていきたい。

バイクレース　長年不振が続いている離島の観光の起爆剤にしようと都知事が打ち出した企画です。昨夏、八丈町長と三宅村長らは知事に同行して、バイクレースで歴史あるイギリスのマン島を視察しました。町からは企画財政課長・住民課長も同行しました。通訳の貴仲やマン島以外の視察費も含め、総額420万円、視察期間は、八丈・三宅のいずれかで開催をめざすようにとの両島の現況調査も行われました。私は、この関の経緯と町の方針をただしました。道路状況がいい、気象後陽で協賛金があつめやすい、住民の合意があるなどの理由から、バイクレースは今秋にまず三宅島で試験的に実施されることになりました。その結果をみながら、八丈でも実施する方向で可能性を検討していきたいとの答弁でした。町の道路事情、交通量、住民の日常生活への影響、自然環境と調和などを検討して議論を深め、住民とのコンセンサスを得ることが重要です。

生ゴミの堆肥化は時間をかけて・・・ 個人視察報告

昨年11月8日、上京の予定にあわせて埼玉県久喜市にある久喜宮代衛生組合を視察してきました。ゴミ焼却場、し尿処理場、剪定枝堆肥化施設、生ゴミ堆肥化施設などが近くに末とまって建てられています。まわりは水田ですがその周囲に市街地が広がっている環境でした。

ここでは、生ゴミだけで堆肥をつくる取り組みがなされています。家庭から排出される生ゴミだけを対象とし、協力してくれる家庭にとうもろこしから作られた分解するゴミ袋を配布し、週に2回、回収車者が回収します。集められた生ゴミは回収袋のまま発酵装置に入れられ（第1次発酵）、40日ほど撹拌され、次に2次発酵装置に移され、全体で2ヶ月間かけて堆肥にされます。種類を加えずにただ撹拌するという方式は、ハザカブラント（2005年優入視察、ニュースレター13号で報告）と同様です。

最終段階で不純物が取り除かれ、堆肥が出来上がります。現在は近隣の農家に無料で配られています。堆肥が特物の生育にどのような効果があるのかについても研究されています。堆肥は、し尿からつくられる液肥、剪定枝のチップ堆肥、生ゴミ堆肥、牛糞尿堆肥、そのほかに、ゴミ焼却装置に移され、灰は堆肥などいろいろあります。どれが優れているというのではなく、用途によって使い分けるのだそうです。

現在はモデル事業の段階で、久喜市と宮代町を含めわせた4万世帯のうち、5～6千世帯がこの事業に協力しています。将来的には全世帯に広げる予定だそうです。わが八丈町でも生ゴミの堆肥化に取り組んでほしいと願っています。どんな材料でどんな方法で堆肥化するのかについては、堆肥を使う立場の意見も入れて、十分に検討して推進してほしい思います。

編集後記

発行が遅れましたが、1期目4年間16号まで、なんとか発行し続けることができました。次回からは2期目の活動報告となりますが、より読みやすく楽しいターに仕ていたと思っています。皆様からお寄せいただく意見や感想がとても力になっています。気軽にお声をかけてください。引き続きのご愛読をお願いいたします。

このページのトップへ戻る
議会だよりのページへ
幸子の表紙ページへ